

## 3つの作業を徹底した理学療法士国家試験対策プログラムの効果について

松 林 義 人\*, 星 野 浩 通, 木 村 和 樹,  
佐々木 理恵子, 北 村 拓 也, 長 島 裕 子

新潟リハビリテーション大学医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻

〔受付：令和元（2019）年9月28日〕

〔受理：令和元（2019）年11月21日〕

キーワード：国家試験対策プログラム，遂行，発言，確認，合格率

**要旨** 新潟リハビリテーション大学（以下，本学）における2018年度の理学療法士国家試験対策として，新卒者ならびに既卒者に対して「遂行」「発言」「確認」の3つの作業を徹底したプログラムを実施し，2018年度の国家試験の合格率ならびに学生の満足度の視点から効果を検証した．結果，新卒者の合格率は90.3%，既卒者を含めた本学全体での合格率は80.9%であり新卒者の合格率は過去最高であった．また新卒者を対象に国家試験対策プログラムに対する満足度アンケートを実施した．アンケート結果より「遂行」の一部を除いて80%程度の満足度を得ることができたが，一部の学生には「遂行」の作業に対して強制的なイメージを抱かせる結果となった．以上から，3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムを実施することで本学における新卒者の合格率は本学1期生が受験した2014年度の第49回理学療法士国家試験以降過去最高となり有効なプログラムであったが，いくつかの課題も明確となり今後さらなる検討が必要であると考えた．

### はじめに

「理学療法士及び作業療法士法（1965年法律第137号）」の制定により1966年に第1回目の理学療法士国家試験（以下，国家試験）が施行され，当時は15%の合格率（1,217名中183名が合格）であった．その後50年以上経過し，1984年から2010年までは90%程度の合格率で推移していたが，2011年以降の合格率は70～

80%と減少している<sup>1)</sup>．国家試験は年1回，全国同日一斉に実施される．試験科目は解剖学，生理学，運動学，病理学概論，臨床心理学，リハビリテーション医学（リハビリテーション概論を含む），臨床医学大要，理学療法であり一般問題（160問）と実地問題（40問）の合計200問を筆記試験にてマークシート方式で実施される．配点は1問1点の一般問題（160点満点）と1問3点の実地問題（120点満点）の合計280点満点で

\* Corresponding author:

新潟リハビリテーション大学

〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16

Tel: 0254-56-8292

Fax: 0254-56-8291

E-mail: matsubayashi@nur.ac.jp

あり、合格するためには合計168点以上および実地問題43点以上を満たす必要がある。ただし不適切問題の有無によって合格基準は変動する場合もある。試験科目の配分として、解剖学、生理学、運動学（以下、基礎医学）が約25%、病理学、臨床心理学、リハビリテーション医学（リハビリテーション概論を含む）、臨床医学大要（以下、臨床医学）が約25%、理学療法が50%である。4年制の理学療法士養成校を例とすると1年生に基礎医学、2年生に臨床医学、3・4年生に理学療法を修得することが多く、国家試験対策においては1・2年生に修得した基礎医学や臨床医学の学習に労力を費やすことが多い。Ebbinghaus<sup>2)</sup>の忘却曲線によると、一度記憶したものは1時間後に56%、1日後に72%忘れていたとの報告もあるため、一度修得した知識を定着させるためには日々の復習が必要である。しかし、看護・保健系大学生の1週間の授業の予習・復習に費やす時間は平均1～5時間が最頻値であるとの報告<sup>3)</sup>から、授業等で修得した知識を定着させるために十分な復習時間を確保しているとは言い難い。

少子高齢化が進む日本においては、2025年を皮切りに団塊の世代が後期高齢者となる「2025年問題」を抱え、認知症をはじめとした様々な疾患の有病率が増加することが想定されていることから、リハビリテーションに対する社会的需要は大いに期待される。このような社会的背景により1998年以降理学療法士の養成校は増加してきたが、一方では理学療法士の急激な増加による若年化と経験不足、また基礎学力の不足が指摘されるようになってきている。また、国家試験の合格率が低下している要因として、理学療法士養成校の増加による受験者数の増加や既卒者の合格率の低下、国家試験問題の難易度の上昇などが考えられるが明らかになってはいない<sup>4)</sup>。

1999年の理学療法士養成施設改訂規制緩和政策により養成施設が増加<sup>5)</sup>した一方で、少子化や大学全入時代による学生確保競争の激化による影響を受け、「学力を問わず入学させているところもある」と文部科学省医学教育課が指摘するような事態が生じている<sup>6)</sup>。本学は2010年に開学し、リハビリテーション専門職の育成に重点を置いてきたが、このような社会的背景において、本学においても開学以来入学者の基礎的学力の低下が懸念されているため、入学前課題等による学習の促進や入学後の基礎的学力向上に向けた取り組みを実施している。しかし、実際には4年間で国家試験に合格できるまでの学力に到達させることが難

しく、国家試験の合格率の改善に伸び悩んでいるのが現状である。本学学生の国家試験対策に対する学習状況を確認すると、「どのように勉強してよいかわからない」や「どこから勉強してよいかわからない」など、学習方法や学習課題の設定・遂行に問題のある学生が少なからずとも存在する。よって、これら学生が抱えている国家試験のための学習方法として、2018年度より国家試験対策の課題に対して「遂行」、「発言」、「確認」という3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムを実施した。

以上から本研究は、このプログラムの効果を2018年度の国家試験合格率ならびに学生の満足度の視点から検証することを目的として実施した。

## 対象と方法

2018年4月の時点で本学のカリキュラム「総合演習Ⅱ」を履修している4年生（以下、新卒者）39名と、2018年度以前の国家試験に不合格であり国家試験受験を希望している16名のうち、本学の2018年度国家試験サポートシステムに登録した既卒者12名の合計51名を対象とした。これらの対象者に対して2018年4月から2018年10月にかけて3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムを実施した。なお、新卒予定者39名のうち2名は2017年度で原級留置となり2018年8月に実施した科目試験にて合格して同年9月に卒業した学生を含んでいる。2018年度国家試験サポートシステムとは、過去の国家試験が不合格であった既卒者に対して2018年度の新卒予定者と同様の3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムへの参加と国家試験受験に必要な手続きを本学にてサポートするシステムのことである。

1. 3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムについて
  - (1) 3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムの基本的な方針

2018年度より前の本学における理学療法士国家試験対策は、主に4年生から過去の国家試験出題問題を中心に課題を「遂行させる」ことを重視していた。しかし、勉強方法が不明確な学生は過去問題を解く作業のみであり、問題の内容を理解し、記憶することができていない状況にあったと推測する。よって、今回は2018年4月～10月の期間は国家試験問題に即した課題を「遂行させる」・「発言させる」・「確認する」という3つの作業を徹底して実施し、2018年11月～2019年2

表1 1クール（8週間）の課題設定

週	課題
1	骨・関節・靭帯
2	筋
3	上・下肢の運動学
4	神経
5	感覚と受容器
6	呼吸・循環
7	姿勢・歩行
8	消化と吸収

課題は、「国試の達人 PT・OT シリーズ 2019 運動解剖生理学編 第24版」（理学療法科学学会編，アイベック）を参考に設定した。

月の期間は今まで本学にて実施していた過去問題を中心に課題を遂行させることを国家試験対策プログラムの基本的な方針とした。

### (2) 課題の設定と遂行について

本学の2018年度4年生は、2018年4月～2018年10月（合計28週）にかけて8週間の臨床実習を2回（合計16週）実施することになっていた。この期間（28週）の中で、臨床実習を実施していない期間は学内での実習（実技練習・症例報告等）および国家試験対策を実施することにした。本研究では、この期間に臨床実習を実施していない新卒予定者ならびに既卒者を対象に8週間を1クールとして、国家試験問題全体の25%以上を占める基礎医学を中心に、課題を1週間毎に設定した（表1）。

対象学生には、1週間毎に定めた課題について、「国試の達人 PT・OT シリーズ2019 運動解剖生理学編 第24版」（理学療法科学学会編，アイベック）を参考図書として「調べノート」を1週間の前半（月曜日から水曜日）で作成させた。「国試の達人」は図表が多く使用され、国家試験に必要な最低限の知識をしっかりと覚えることができるようにまとめられた参考図書である。「調べノート」は、学習方法の明確化と教員による確認をすることを目的として作成させた。学生には「調べノート」の作成方法として、「国試の達人」に記載されている内容を模写し、理解できていない内容を他の参考書等を調べて追記するように指示した。

### (3) 課題内容の発言について

「調べノート」を作成させた後、木曜日は4～5名程度によるグループにて、「調べノート」に記載した内容をそれぞれ発言させ、グループ間での情報共有な

らびに不足している部分の確認をするグループ・ワークを実施した。

### (4) 課題内容の教員による確認について

学習方法を確認するための「調べノート」に加え、教員が学生の学習状況の把握をできるように「自己管理シート」を使用した。自己管理シートは、自己の行動、態度や感情などを観察または記録することで、自己に対する具体的かつ客観的な評価を通して健康行動の形成維持に役立つ<sup>7)</sup>とされている。たとえば、体重減量プログラムに効果的であると報告<sup>8)</sup>したものや介護予防のための運動習慣化に対する取り組みに有効である<sup>9)</sup>としたセルフモニタリングがあり、本研究で使用した「自己管理シート」もそれらを参考に作成した（図1）。自己管理シートの活用により、学習目標を自ら設定し、その達成に向けて自らの行動を能動的に変化させていく「自己調整学習（self-regulated learning）」<sup>10)</sup>に加え、自分自身の行為をモニターし、調整や修正するために計画を立てる機能であるメタ認知<sup>11)</sup>を養うことで、国家試験対策の学習に対する行動変容が促進できると考えた。これらの理論を基に、本研究では学生が自ら1週間の学習到達目標を立て、その目標に対してその日の学習到達度を記録させ、「調べノート」とともに教員と学生との情報交換ツールとして使用する役割として自己管理シートへの記載を求めた。

木曜日のグループ・ワーク終了後は担当教員によるホームルームを実施し、「調べノート」「自己管理シート」の確認とグループ・ワークの進捗状況確認を行い、学生の学習状況を確認し、必要に応じて学習方法の指導を実施した。また、翌日の金曜日は、設定した課題の内容について確認テストを実施した。確認テストは、国家試験の過去問題を基本に一部改変し、一問一答形式による正誤問題100問（100点満点）とした。今回実施した国家試験対策プログラムの1週間のスケジュールを表2に示す。

## 2. 国家試験対策プログラムの効果検証

### (1) 国家試験合格率の比較

2019年2月24日（日）に「第54回理学療法士国家試験」が施行され、同年3月25日（月）に合格発表が行われた結果より、本学のこれまでの国家試験合格率と比較し、3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムの効果について検証した。

### (2) 確認テストの結果比較

毎週金曜日に実施した確認テストの結果より、国家

**国家試験対策 自己管理シート (記入例)**

国家試験対策の目標を定め計画を立て、到達度を記録しよう。

- ◇2週間の目標を立てましょう。  
例) ○○分野の問題達成率80%以上を目指す!
- ◇1日のスケジュールを決めて行動しましょう。
- ◇到達度チェック: 目標・計画に対する到達度を4段階で記録しましょう。
- ◇目標を到達するための「楽しみ」を見つけましょう。

<b>4月9日～4月20日の目標</b>
・「関節の軸と形態による種類」について、表を作成して完全にマスターする。 ・筋: 起始停止別について単語帳を用いて完全マスターする。

<b>楽しみ</b>
・日曜日は、友達と万代まで遊びに行ってお気分転換する。

**1日のスケジュール計画**

午前	午後	帰宅後
7時 起床 8時 登校 8時15分～11時30分 大学にて課題学習 11時30分～12時30分 屋食・休憩	12時30分～15時 臨床医学の自己学習 15時～17時 ゼミでグループワーク 17時15分 帰宅	17時30分～19時 自由時間 19時～21時 夕食・風呂 21時～23時 自己学習 23時 就寝

**達成度**

	月	火	水	木	金	土	日
	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日
到達度 チェック	4	2	4	HR	確認テスト		休み
	日	日	日	日	日	日	日
到達度 チェック				HR	確認テスト		

目標達成度 (○をつけましょう)			
大変 よくできた	よくできた	あまり できなかった	できなかった
4	3	2	1

教員確認	印
------	---

図1 自己管理シート

自己管理シートには、学生が自ら1週間の学習到達目標を立て、その目標に対してその日の学習到達度を記録させた。

表2 国家試験対策プログラムの1週間のスケジュール

曜日	月	火	水	木	金
		「遂行」		「発言・確認」	「確認」
作業		・ 調べノートの作成		・ グループ・ワークにて発言 ・ 調べノートを教員が確認	・ 確認テストの実施
自己管理シートにて学習到達度の記録と教員の確認					

表3 第54回理学療法士国家試験の本学の結果

	総数			新卒者			既卒者		
	受験者数 (名)	合格者数 (名)	合格率 (%)	受験者数 (名)	合格者数 (名)	合格率 (%)	受験者数 (名)	合格者数 (名)	合格率 (%)
本学の全受験者	47	38	80.9	31	28	90.3	16	10	62.5
国家試験対策 プログラム対象者	43	37	86.0	31	28	90.3	12	9	75.0

既卒者16名のうち、12名が国家試験対策プログラムを実施し、4名は本人の希望により国家試験対策プログラムを受けなかった。

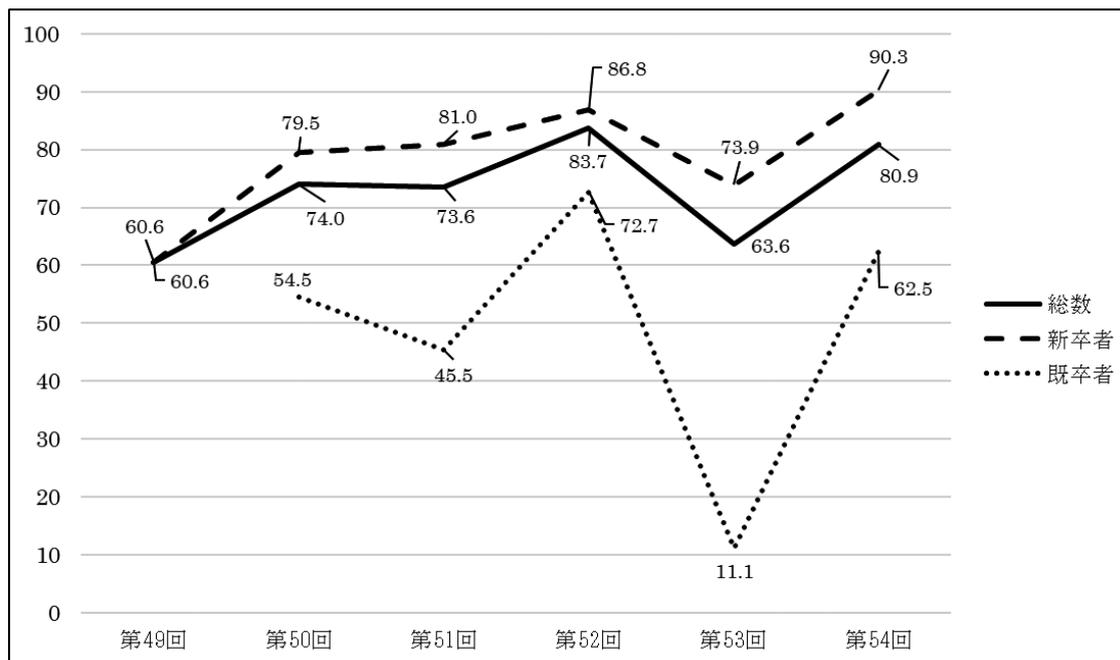


図2 本学の国家試験合格率の推移

※第49回は本学1期生（新卒者）のみの受験のため既卒者は該当なし。

試験の合格者の平均点と不合格者ならびに未受験者の平均点について、対応のないt検定を用いて比較し、国家試験合格者の見込みラインの予測について分析した。なお未受験者とは、総合演習Ⅱの科目試験に対して不合格であったため原級留置となり、国家試験を受験できなかった学生のことを指す。統計解析にはSPSS for Windows Version22を使用した。

(3) 3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムに対する満足度調査の実施

本研究で実施した3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムに対する学生の満足度について、国家試験を受験した新卒者31名を対象に無記名式のアンケートを実施した。アンケート内容は、課題の設定、調べノートの作成、グループ・ワークによる発言、調べノートを教員が確認、確認テストの実施、自己管理シートの記録と確認、全体の満足度の7項目に対し

て、「とても満足している」・「満足している」・「どちらとも言えない」・「満足していない」・「とても満足していない」の5段階尺度での回答とそれぞれの質問項目に対するコメント（自由記載）を求めた。既卒者に対しては、国家試験受験後にアンケートを実施する機会を設けることができず実施することができなかった。なお、アンケートは新潟リハビリテーション大学倫理委員会の承認（承認番号152）を得ており、対象学生には研究目的であることを書面と口頭にて説明し、同意が得られたうえで実施した。

結果

1. 国家試験の合格率について

「第54回理学療法士国家試験」を本学から受験した総数は47名（内訳として、新卒者31名、既卒者16名）であった。2018年4月の時点での新卒予定者は39名で

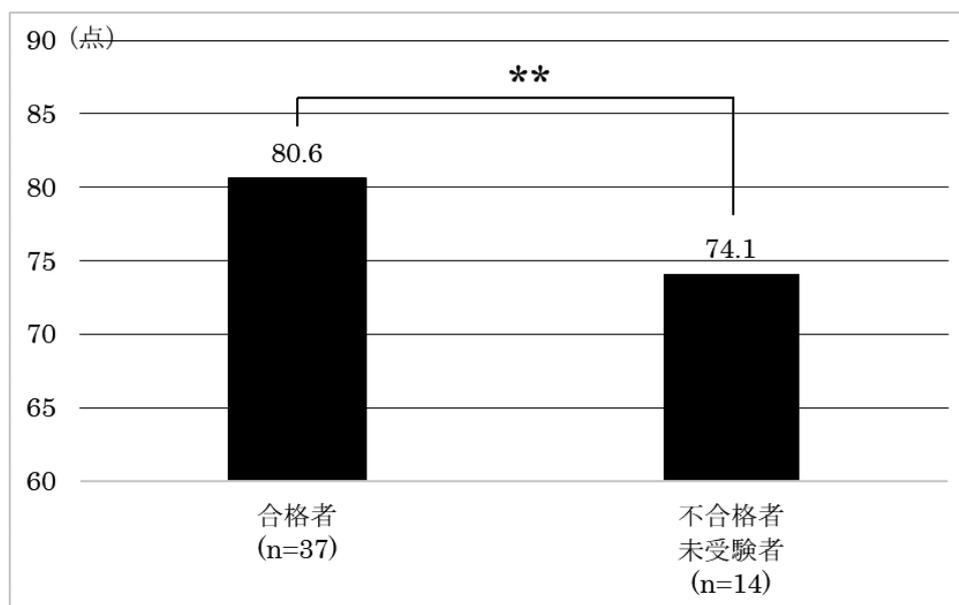


図3 確認テストの結果比較

合格者の平均点と不合格者ならびに未受験者の平均点を対応のないt検定を用いて比較した結果、両群間に有意な差がみられた ( $p < 0.01$ )。

省略形：\*\*  $p < 0.01$ , n.s. not significant

表4 国家試験対策プログラムに対する満足度調査の結果

作業		n (%)				
		とても満足している	満足している	どちらとも言えない	満足していない	とても満足していない
遂行	1. 課題の設定	7 (25.0)	16 (57.1)	4 (14.3)	1 (3.6)	0 (0.0)
	2. 調べノートの作成	6 (21.4)	12 (42.9)	5 (17.9)	5 (17.9)	0 (0.0)
発言	3. グループ・ワークによる発言が確認	12 (42.9)	12 (42.9)	4 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
確認	4. 調べノートを教員	7 (25.0)	20 (71.4)	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
	5. 確認テストの実施	11 (39.3)	15 (53.6)	2 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
遂行と確認	6. 自己管理シートの記録と確認	6 (21.4)	20 (71.4)	2 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
	7. 全体の満足度	11 (39.3)	13 (46.4)	3 (10.7)	1 (3.6)	0 (0.0)

国家試験対策プログラムに対する学生の満足度調査を新卒者31名に実施し、28名より回答が得られた (回収率90.3%)。

あったが8名の学生は2019年2月の時点で卒業要件を満たさなかったため国家試験を受験できなかった。これら未受験者は、もともとの学習状況が不良であることや、国家試験対策プログラム（特にグループ・ワーク）への参加率が低く、調べノートや自己管理シートの遂行不良等がみられた。

国家試験受験の結果、47名中38名（新卒者28名、既卒者10名）が合格し受験者総数の合格率は80.9%であった。このうち国家試験対策プログラムの対象である新卒者（31名）と既卒者（12名）の合格率は86.0%

であった。内訳として、新卒者は28名の学生が合格し90.3%の合格率、既卒者は9名が合格し75.0%の合格率であった（表3）。本学の国家試験合格率の推移を図2に示す。

なお、国家試験対策プログラムを受けなかった既卒者4名のうち1名が合格し25.0%の合格率であった。

## 2. 確認テストの結果について

国家試験対策プログラム対象学生51名に8回実施した確認テストの平均点は、国家試験合格者（37名）で

80.6点、国家試験不合格者（6名）ならびに未受験者（8名）は74.1点であった。対応のないt検定による統計学的分析の結果、国家試験合格者と国家試験不合格者ならびに未受験者との間に有意な差（ $p<0.01$ ）がみられた（図3）。

### 3. 国家試験対策プログラムに対する学生の満足度調査の結果について

国家試験対策プログラムに対する学生の満足度調査を31名に実施し、28名より回答が得られ、回収率は90.3%であった。

アンケート結果を表4に示す。アンケート結果より、「調べノートの作成」以外の項目は80%以上の満足度を得ることができ、国家試験対策プログラムに対する全体の満足度も85.7%を得ることができた。質問項目のコメントには、「学習方法が明確でよかった」や、「課題が明確に設定されているため計画的に進めることができた」といった意見があった一方で、「調べノートの作成」に対して「自分にあった学習方法を実施できない」といった国家試験対策プログラムに対して強制的なイメージを抱く意見がみられ、満足度も64.3%と他の作業と比較すると低い値であった。

### 考察

今回、3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムを2018年度に実施し、その効果について検証した。その結果、新卒者の合格率は90.3%であり過去最高であったが、既卒者の合格率は62.5%、本学全体の合格率は80.9%であり、「第52回理学療法士国家試験」（2016年度）の結果を上回ることができなかった。しかし、国家試験サポートシステムにて国家試験対策プログラムを実施した既卒者の合格率は75.0%であり、新卒者を含めた本学全体の合格率は86.0%となり過去最高の結果となったことから、国家試験対策プログラムの効果についてある程度評価できるものとなった。また、学生の満足度調査の結果より、全体的に80%程度の満足度を得ることができたことから効果があった。以上の結果について、次の通り考察する。

学習の定着についてラーニングピラミッドを用いられることがある。これは、National Training Laboratoriesによって「平均学習定着率調査」（1946年）の報告<sup>12)</sup>をもとに作成されたものであるが、その後様々な研究者等によって改変されている。ラーニングピラミッドは授業等で学習した内容を6カ月後にどの程度記憶しているかを図式化したものであり、講

義の聴講で5%程度にはじまり、グループ・ディスカッションでは約50%、他人に教えることで約90%の学習の定着を図ることができるというものである。本研究で実施した国家試験対策プログラムをラーニングピラミッドに当てはめて検討してみる。まず、3つの作業のうちの1つ目の作業である「遂行」させることについて、ラーニングピラミッドでは「講義」や「読書」、「視聴覚」に近く受動的な学習であることや、内化（問題の解決に必要な知識を習得すること<sup>13)</sup>）であり、学習定着率は5~30%程度であると推測される。これまでの本学の国家試験対策は、過去の問題を「遂行させる」ことを重視しており国家試験合格率の向上には課題がみられた。この原因としては、課題に対して最大でも30%程度の学習定着率しか得られなかったと推測する。

次に2つ目の作業である「発言」について、1つ目の作業と同様にラーニングピラミッドを参考にすると、「グループ討議」や「他人に教える」ことで50~90%程度の学習定着率があると示されている。文部科学省は2012年に大学教育の質的転換に向けての答申<sup>14)</sup>において課題解決型の能動的学修（以下、アクティブ・ラーニング）の成果を取り上げ、今後アクティブ・ラーニングを取り組んだ学士課程の教育モデルの発展・展開に期待するとしている。アクティブ・ラーニングの定義について、文部科学省<sup>13)</sup>は「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」としている。過去の国家試験対策においてもグループ・ワークによる学修を指導していたが、グループ編成や方法論が不明確であることの課題があり効果を得るまでには至らなかった。この反省を活かし、本研究において実施した国家試験対策プログラムにおいては、グループ・ワークを毎週木曜日に実施することを義務付けた。グループ編成については学生自ら編成を決めたグループとし、グループ・ワークの方法論について明確に提示した。これらより、過去と比較すると効果的なグループ・ワークが実施でき、学習定着率が向上したと考える。また、学生満足度の結果からもグループ・ワークについて「非常に満足している」「満

足している」に約86%の学生が回答していることから有効であったと解釈できる。

3つ目の作業である「確認する」については、設定した課題範囲の確認テストと学習状況を記録し、教員が確認するために自己管理シートへの記載を求めた。「確認する」作業の効果として、確認テストを実施することにより外発的動機付けが働き、自己管理シートにて学習状況や到達度を自己評価（メタ認知）することで学習の習慣化に結び付けることができる行動変容を促すことができた。これらより自己管理シートは、自己調整学習の理論に基づき学生自らが能動的に学習するためのツールとして働き、学習意欲を向上させる一助となると考える。

また、合格した37名の確認テストの平均点は80.6点であり、不合格者ならびに未受験者の平均点の74.1点と比較すると有意に高い結果であった。国家試験の合格基準はおおよそ6割以上であるが、今回実施した確認テストの結果より過去問題を中心とした国家試験対策としての取り組みについては8割以上の到達度が国家試験合格の見込みラインであることが示唆できる。

以上から、3つの作業を徹底することで学習方法が明確となり、学習内容が定着したことで2018年11月以降の過去問題を中心とした学習を円滑に進めることができるようになった。3つの作業を徹底するためには、国家試験対策プログラムの主旨・目的・スケジュール等を明確に学生へ提示し、学生と教員が共通に認識をもって確実に進めることが必要である。結果、国家試験の合格率の向上や、国家試験対策プログラム全体に対して80%以上の満足度を得ることができたことから、本研究は有益な効果を得ることができたと示唆できる。

しかし、本研究で実施した国家試験対策プログラムでは課題も残されている。国家試験対策プログラムを開始した2018年4月時点での新卒予定者は39名であったが8名が卒業要件を満たすことができず国家試験を受験することができなかった。また、学生満足度アンケートより、すでに学習方法を身に付けている学生にとっては「やらされている感」があり、自分にあった学習時間を確保できないなどの煩わしさを感じるなどの意見もあった。また、本研究で実施した国家試験対策プログラムではカリキュラムによる時間的制約により、国家試験問題全体の25%以上を占める基礎医学しか取り組むことができなかった。これら課題が明確になったことにより、本研究で実施した国家試験対策プログラムは今後さらなる検討が必要であると考えられる。

以上から、今後は3年生から国家試験対策プログラム実施することで4年生での未受験者を減少させ、基礎医学に加えて臨床医学と理学療法に対しても取り組む計画性が必要である。また、学生個々の学習状況を把握し、その学生に応じた個別支援が行うことでより有益な国家試験対策プログラムになると考えた。

## 結論

2018年度に本学において「遂行」「発言」「確認」の3つの作業を徹底した国家試験対策プログラムを実施した。その結果、国家試験合格率の向上を図ることができ、また学生からもプログラム全体に対して80%程度の満足度を得ることができたことから、有効なプログラムであった。この理由として、学習方法や学習課題の設定・遂行に問題のある学生に対して、学習を明確かつ計画的に進め、学習の定着とメタ認知を促進させることができたためであると考えられる。しかし、未受験者が生じたことや、学習方法が明確である学生にとって煩わしさを感じるという課題が明確となり、今後は学生に応じた個別支援の観点も踏まえたプログラムの検討が必要である。

## 謝辞

本研究は2018年度新潟リハビリテーション大学学長裁量経費による助成を受けて実施した。

## 引用文献

- 1) 日本理学療法士協会：理学療法士国家試験合格者の推移，2019. (Accessed 2019-10-21) <http://www.japanpt.or.jp/about/data/statistics/>
- 2) Ebbinghaus, H.: Memory: A contribution to experimental psychology. New York, Dover, 1885.
- 3) 文部科学省国立教育政策研究所：大学生の学習実態に関する調査研究について（概要），2016. (Accessed 2019-10-21) [http://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf06/](http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf06/)
- 4) 眞保実，菅沼一男，金子千香，他：定期的な授業外学習の介入による医療系基礎学力の変化，帝京科学大学紀要，13：131-136，2017.
- 5) 厚生労働省：理学療法士・作業療法士の需要推計を踏まえた今後の方向性について，2019. (Accessed 2019-10-22) <https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000499148.pdf>
- 6) 読売新聞教育ネットワーク事務局：大学の實力2017，初版，中央公論社，東京，2016，14-17.

- 7) Wing RR, Hill JO: Successful weight loss maintenance. *Annu Rev Nutr*, 21: 323-341, 2001.
- 8) Baker RC.: Self-monitoring may be necessary for successful weight control. *Behavior Therapy*, 24: 377-394, 1993.
- 9) Matsubayashi Y, Asakawa Y, Yamaguchi H: Low-frequency group exercise improved the motor functions of community-dwelling elderly people in a rural area when combined with home exercise with self-monitoring. *J Phys Ther Sci*, 28: 366-371, 2016.
- 10) 福田隆志：自己調整学習研究の展望：制御焦点理論の応用可能性について，*哲學*，136：125-160，2016.
- 11) 杉谷乃百合：「大学生のモチベーション，メタ認知，学習スキル」，*キリストと世界（東京基督教大学紀要）*，22：105-113，2012.
- 12) National Training Laboratories：Edgar Dale“Audio-Visual methods in teaching” 1946
- 13) 文部科学省：アクティブ・ラーニングに関する議論，2015。（Accessed 2019-09-23）[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110\\_2\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_5.pdf)
- 14) 文部科学省：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～（答申），2012。（Accessed 2019-09-23）[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)



# Effectiveness of the National License Examination Preparation Program for Physical Therapists Focusing on Three Tasks

Matsubayashi Yoshito \*, Hoshino Hiroyuki, Kimura Kazuki,  
Kitamura Takuya, Sasaki Rieko, Nagashima Yuko

Physical Therapy course, Department of Rehabilitation, Faculty of Allied Health Sciences, Niigata University of Rehabilitation, Niigata, Japan

[Received: 28 September, 2019]

[Accepted: 21 November, 2019]

Key words: National Examination Program, Pursuance, Speech, Confirmation, Pass rate

**Abstract** A program focusing on three tasks – “pursuance”, “speech”, and “confirmation” – was implemented in Niigata University of Rehabilitation as a preparation for the National License Examination for Physical Therapists in 2018, and its effectiveness was reviewed from the perspectives of the pass rate for the examination and student satisfaction. As a result, the pass rate of new graduates was 90.3%, and the pass rate of applicants in our university including previous graduates was 80.9%. The pass rate of new graduate numbers are the highest rates ever. In addition, a satisfaction questionnaire for this program targeting new graduates was implemented. The results of the questionnaire showed that around 80% of satisfaction was obtained for except for a part of “pursuance” task, while some graduates had an enforced image on “pursuance”. Accordingly, although new graduates of our university achieved the record-high pass rate by implementation of the national license preparation program, not all of the graduates passed the examinations, so we are not fully satisfied with the outcome. Additionally, for “pursuance” among the three tasks, some opinions indicated that it caused an enforced image, so further discussion is required.